「四国のみち」ガイドブック発売中

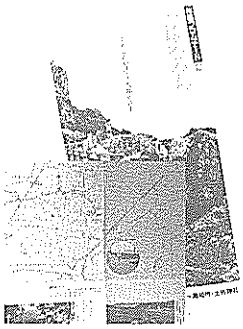
四国のみちは、建設省と環境庁が整備を進めている自然遊歩道。徳島県鳴門市を起点、徳島県板野郡板野町を終点とする、四国霊場や身近な自然、歴史を体感できる全長一五四五・六キロの道です。

このうち、室戸―高知間約一一六キロが平成二年度でほぼ完成するのに伴い、「四国のみち」のガイドブック「体感プロムナード2『四国のみち』くろしおが洗う、太陽の道」を作成しました。

二万五千分の一の地図に、道標や案内版の位置などのルート案内や、みどころ、イベント、交通、宿泊などの情報を満載しています。

◪定価　700円

◪発売所　㈱四国建設弘済会（高知市大川筋一―二四　☎73 0123）



'90土佐のまほろば祭り うちわ当選番号発表

'90土佐のまほろば祭りでお配りした番号付きうちわは、抽選の結果次の番号が当選となりました。当選した方は、番号の付いたうちわを持って市役所産業経済課商工水産係まで引き換えに来てください。商品の交換は、9月末日までとしますので、お早めに。

うちわ当選番号

1等（エアコン）	09692
2等（机・椅子・スクリーン）	03186
3等（扇風機）	12308
	11100
4等（時計、スポーツバッグ等） 下3桁	816
	707
5等（ラジオ、ハンカチ等） 下3桁	138
	748
6等（ボールペン） 下2桁	48
	52
7等（えんぴつ） 下1桁	7

―同和教育シリーズ―

部落はいつ、だれが、何のためにつくったのでしょうか⑧

前号まで述べてきたように、幕府や藩の厳しい年貢の取り立てや、賦役・加役に不平不満を持った百姓たちは、最後には命がけで反抗を始めました。

幕府や藩は、これに対して厳しい刑罰を公開の場で加え、権力に対する恐怖心を与えて服従させようとしました。特に、幕府や藩が恐れたのは百姓たちが団結することでした。

そこで、百姓たちの団結を分断し、互いに対立させて「支配者には黙って服従したほうが得だ」という、あきらめの気風を植え付けるために、四民よりさらに低い身分をつくろうとしたのです。

それでは、日本の歴史のなかで、現在の同和地区の元になった集落は、いつごろ、どのようにしてつくられたのでしょう。残念ながら、江戸時代のどの時期に、どのような法令によってつくられたのか、正確な記録は残っていません。

江戸時代の幕藩体制が固まりかけた三代将軍・家光のころから、幕府や藩は、少しずつ「おお触れ」や「覚書」などによって「きまり」をつくり、それが民衆の生活に定着したころに、新しい「きまり」を出すといった方法で、あたかも「既成の事実」であるかのように思わせ、長い年月をかけて固定化していったと言われています。

では、どのような人たちが、さらに低い身分に組み込まれたのでしょう。これについても確かな記録はありませんが、長い戦乱の間に、中世から賤視されていた人々が、農民や町人の仲間となったり、戦いに敗れて没落した武士のなかにも、故郷を捨てて流浪する者もありました。農民や町人のなかにも、住んでいた町や村が戦場となって焼き打ちに遭い、家族で土地を離れて流浪の生活を送らざるを得ない者も多くいました。

このように、時代の返遷のなかで、新しい下層民衆が生み出されました。

近世中期につくられた「村明細帳」という村勢一覧には、農民や町人とは別に、紺屋・猟師・座頭・針子・鍛冶・猿廻し・鉦たたきなどといった二十八種類の仕事別・身分別の者が登録されています。このほとんどが制度的な身分ではなく、慣習的な身分であったと考えられています。一般民衆よりは卑しく扱われていました。

これらの下層民衆と言われた人々のうち、武具や馬具に欠かせない皮革を扱うことを業とする者に対して、各大名は皮革の独占権を許し、城下に集団移住させました。そして、その頭領を支配下に置き、転職を禁ずるかわりに禄を与え、なかには「御皮師」として武士扱いとされた者もいました。この人たちを後に「かわた」「皮多」と呼ぶようになります。

このような賤視された人たちの中でも、経済力をつけ、農・町民となった者もいます。しかし、幕政改革の時代に、分裂支配強化のための身分固定政策によって、一部の人たちは差別の対象として、下層身分に組み入れられたと考えられています。

（つづく）